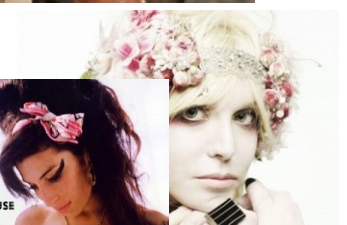




Blue 狂裂!!

CAMERA PRESS DIGITAL



ダメージ加工されたデニム。

その2片の小さな布裂はぬのきれチュニジャン・ブルーの紐で繋がっている。

靴紐のように交叉し、レース・アップと呼ばれるスタイルをなすミニ・パンツ。

紐は3本の細い紐を編み込んで太い1本の紐にしたもので、下着を穿かない彼女
の大腿筋や中殿筋の部分の膚が透ける。

何もかもがアグレッシブな派手さを持っていた。

カラー・コンタクト・レンズは黒く縁取られた青瑠璃色で、眸ひとみの虹彩は薔薇窓のような文様。オニユリのおしべのように長く反り返ったつけ睫毛は蝶々のような瞬きするたびにまるで大瑠璃アゲハがゆつくりと上下に羽を動かすかのようである。或いはアンティーク・ジュエリーのようにも見える。

ロールしながら腰まで垂れた髪は青と緑と金色。パンツのポケットからCのブルース・ハープを出すと、古いブルースの4小節を吹く。

ギャルのような見掛けとはまったく異なり、彼女らは17歳のブルース・バンドだった。彼女らのアイドルは、チャーリー・パットンやロバート・ジョンソンやベッシー・スミスやウイリー・デイクスンやハウリン・ウルフやバディ・ガイ

やマデイ・ウォーターズであつた。

ニューヨークのダウンタウンにありそうな1室、赤煉瓦の壁には。古いジャズ・ミュージシャンやブルース演奏者のセピア色の写真が飾られている。神中洲にあるブルース喫茶『バーボン・ストリート』だ。

「なぜブルースを。同世代の女の子たちが好んで聴くとは思えない音楽をなぜ選んだのですか」

ポケットから出したブルース・ハープを弄っていた彼女は物憂げにこう応える、
「好みって、実際には、通俗的なイメージとはぜんぜん違っていて、多様だよ。
不思議はないわ」

「では、きっかけは」

「メンバー、それぞれで違うわ。」

あたしはユーチューブね。

v v w (クワドループル・ヴィ。4重のVという意味。由来は Very Very Well-done の頭文字) を観てからね。イタルが歌った『I've Got Blues』でター
ン・オンしたのよ。ハープが凄くってね。でき、ブルースって、いったい、何な
んだろう、ってね。そしてルーツ・バックしていったら、デルタ・ブルースって、
ちよーイケてた。ただ、それだけさ」

「プロダクションや音楽事務所からのオフアーを断ったって、聞いていますが」

「女子小学生がアイドル・グループ作ったり、女子中学生がバンドやったり、女子高生が小説書いたりすると話題になって人の注目が集まる。耳目が集まれば、金になるから企業もメディアも寄ってくる。そんなの、くだらない。」

あたしたちはそんなのになりたくない。ただ、それだけよ」

「多くの人に聴いてもらえと思うんですが」

「別に。」

人に聴かせるためにやってるんじゃない」

「では、何のために」

「さあ。」

Rebel Without a Cause ぐてとね。それだけ」

「理由はない、と」

「でしょうね。何のために生きているのか、って言われてもわからないし。

何で活動しているか、表面的な理由はあっても、そんなの本物じゃない。言辞に過ぎないし。

どうせ、あたしだっていずれ死ぬし、聴く人も死ぬし、歴史に名を遺しても人類自体がいつか滅びるわ。何しても意味はない。虚しさすらない。ただ、それだけだよ」

一年前。

梨沙は変な音が聞こえることに気が附いた。

放課後の教室に独りでいる時だ。明日から試験なので、部活もなく、生徒はすべて早めに帰宅していた。

廊下に出たが、逆に音は聞こえなくなった。教室に戻って耳を澄ます。

「屋上？」

1年生の教室は4階だった。音は上から聞こえるような気がする。

「でも屋上って上がったことないけど、行けなかったんじゃないの？」

1年1組は東側階段の傍だったので、屋上へ行く階段を上った。屋上に出るガラス戸に手をかける。開いた。鍵はかかっていない。入学してすぐの時、屋上には上がるなど言われていたので、できないものだと思い込んでいたようだ。今となつては、なぜ行けないと想っていたのか、定かにはわからない。音ははっきりと聴こえるようになっていた。

出してみる。初夏の爽やかな風が頬を撫でた。

「あゝ、気持ちいい」

一瞬、目的を忘れて眼を細めた。

緑と畑と瓦屋根の家屋が点在する平地が広がっている。どこまでも広い。その

向こうは白い雲と青い空。

「わあ、いいな、早く気が附けばよかった」

だが、出られるからといって、出ていいわけではないことを思い出す。

「そうだ、そんなことをしに来たんじゃなかった」

見廻す。手すりに寄り掛かって空の方を向いている一人の女生徒がいた。背中しか見えないが、両手を顔に当てている。自分と同じ1年生だと気が附く。制服のデザインは全学年共通だが、上履きのラインの色で学年がわかる。

近附いた。

少女が振り向く。知った顔だった。当たり前といえ、当たり前だが。

「何してんの、尹緒^{いおん}夢。

こんなところで」

髪を少し茶色に染め、グラデーション気味に部分的に赤くしている。頭髮検査のある学校だったら、毎回不合格になっていただろう。青瑠璃アゲハの羽色のよ
うな色のきつく深く鮮やかな濃い青のカラコンの双眸につけ睫毛をしてマスカ
ラをたっぷり塗り、濃いアイ・ラインを引いている。左目尻の下にあるほくろが
黒い星のように見える。

「別に。あんたに関係ない」

梨沙は彼女がそういうキャラなのは知っていたので気にも留めず、

「それ、何？」

「え？」

「それだよ、手に持ってるやつ」

「ああ、これか。ほら」

眼の前に差し出される。BLUESHARPという文字がプレスされていた。

「ハープ？」

「豎琴じゃねーよ、ハーモニカだよ。ブルース・ハープってんだよ」

「ふーん、そんなに小さいんだ」

「単音だからな。学校で使ったクロマティックならもう少し大きい」

「そう言えば、そんなのあったね」

「どうでもいい」

「何でハープなの？」

「横から見るとハープに似ているかららしい。昔、アメリカじゃマウス・ハープって呼んだみたいだよ。で、単音十穴のハーモニカをハープって言うんだ。」

最初はホーナーって会社で作ったハーモニカのモデルにブルース・ハープって名前を附けたってことらしい。それが始まりらしいよ」

「へー、変な音だったけど、楽しいの？」

「変じゃねーよ」

「吹いてみてよ」

「いいよ」

吹く。

「変な音。何かさあ、昔のアメリカのアニメみたい」

「何だそりゃ」

「何となくさ、白黒の、古いミッキーの映画、思い出した」

「そんなのあったか」

「わかんないけどさ」

「たぶん、ないよ。勘違いか、思い込みだな」

「わかんない」

「彝佐って、ピアノやってなかったっけ。小学校の時、音楽の時間、先生に指名されて弾いてたよね」

「習ってたからね。小さい頃は。もう忘れたよ」

小中も同じだった。

「ギター弾いてみないか。バンドやろうよ」

「何で急にトモダチっぽいわけ？」

「悪いか？」

「えー、別に——」

「じゃ、やるよね」

「えー、ムリだよ」

「いいから、やるんだよ」

「って言うかさあ、バンドって、二人でできるの？」

「他にもメンバーがいなくちゃ、あたしは嫌だね」

と言っても彼女が精力的にメンバーを探すそぶりはなかった。何しろ、

「ネットに載せようよ」

と妥当なことを言えば、

「いつかはね。今はそういう感じの気分じゃない」

という返事だ。訝しげに眉を顰め、梨沙は、

「何なの？」

そうでもいいわという感じで、空を見ながら、

「もつとフィジカルにやりたいのよ」

「どういうこと？」

「恋愛ってよりは交尾、みたいな」

「下ネタ？」

「全然違う」

「何なの？」

「理由なんかないわ。理由なんかくだらない。ただカタチだけじゃない。そんなもんにどんだけの力があるの？　いったい、そいつに何ができるって言うの？　それで現実が動くの？　動かないなら意味ないわ。動かせないンなら用はないわ。意味つてのは、現実が動くってことよ。あたしたちは現実を生きてんのよ、夢ン中じゃないわ」

「何でイラついてるの？　別に理由がどーのとか、わたし、言っていないじゃん。急に興奮してさ。そんなにまくし立ててさー、溜まつてるの？」

「別に。」

とりあえず家においで
ウチ

「何なの、唐突に」

「説明する。見せたいものがあるし、見ればわかると思う」

「何を？」

「バンドだよ。来な」

「ふーん。よくわかんないけど、わかった。

行っているの？」

「何で？」

「だってイラついてるからさ」

「それとこれは関係ない。そもそもイラついてないし。さ、行こう」

「OK、いいよ」

尹緒夢の家。奇妙な家だった。黒い煉瓦の洋館である。正確に言うと焦げた深紅であった。Bordeaux を黒くしたような。

それは丘の上にあった。高層マンションの半分くらいの高さしかない低い丘だ。鬱蒼とした中低木が離島のように所々あるが、中腹から上には緑の濃い低い草が生えるのみで、時折、白い岩が露わになっている。

「こんなとこ、地元にあったんだ」

「あたしらの小・中学校の学区って、すごく広いからね。通っている学生でも、学区内に知らない場所はたくさんあるさ」

そう言つて尹緒夢が笑う。

「何かさあ、むかし、テレビで観たスコットランドの映像に、何となく似てる」

「ハイランドか」

「うん。そういう感じ。で、それもそうなんだけどさー、尹緒夢、あなたのお家つて、お城みたいね」

「城には見えないな。洋館だ」

家は石垣で囲われていた。石は黒っぽかった。ブルーストーンという玄武岩の一種である。建物の色とのコントラストが異様であつた。黒い青に黒い赤。

「すごい」

2階建てくらいの高さの鉄柵の門があり、その脇に石垣に穿たれた通用口があった。鍵を開けて入る。扉は厚い板を鉄の板と鋸で留めた、古いものだった。きれいな芝の庭があつて所々にブルーストーンが立っていた。その立ち方が様々で、多くは傾いている。

小さな環状列石があり、中心に大きな石が立っていた。

「リングだよ、シヴァ・リング」

尹緒夢が説明したが、梨沙には意味がわからない。

玄関は背が高く、2本の円柱で支える屋根があり、その上は厳めしい石の塀が囲むバルコニーになっていた。両脇に塔がせり出して立っている。手すりの附い

た広い階段を上って、玄関の前に立つと、上と左右から挟まれたような気分になる。

入るとすぐに暖炉のあるエントランスだった。

「こつちよ」

尹緒夢に案内されて梨沙は階段を上る。手すりの附いた広い大理石の階段だった。

「大邸宅って感じ。お屋敷だわ」

「こつちへ来て、ほら、ここがあたしの部屋。入って」

「うわあ」

部屋はゴシックな雰囲気であつた。歴史的なゴシックではないが、昨今言われる意味で、ゴシック的であつた。ある意味ではサイケデリックでもあつた。古き良き時代のヨーロッパの（特にイギリスのヴィクトリア朝時代のような）テイストがあるクラシカルなサイケだ。ペルシア絨毯に大理石を使った暖炉、歴史を描いたゴブラン織のタペストリーが壁に掛けられ、革張りの椅子に、背の高いアーチ形の窓に荘重なカーテン、シルクを織つて天球の描かれた天蓋の附いたベッドに、大きなシルクの枕カバーにシーツ、繻子のクッション……

しかし壁に貼られたポスターは往年のジャズやブルース奏者たち、エディ・コ克蘭やバディ・ガイ、ローリング・ストーンズやセックス・ピストルズ、カー

ト・コバーン（ニルバーナ）などであった。大きなアンプとスピーカーがありその傍らにフォーク・ギターとエレキ・ギターが置かれている。

「ここで演奏するの？」

梨沙は眼を丸くした。

「そうよ。防音になってるから。こう見えてもさ。録音機材もある。

スタジオとしてよい場所ではないけれど、スタジオとして使えなくもない。

：ま、そんな感じ。窓ガラスも二重だし」

「すごい」

「さ、坐つてよ。モニター観て」

リモコンのスイッチを入れる。

1976年ロンドン、セックス・ピストルズのステージだった。細身のネクタイを緩く締めたボーカル（ジョニー・ロットン。ロットンは「腐った」の意味）の髪は突っ立っているが、その後代に出て来たパンクスとは異なり、きれいにそろえて立っているのではなく、短い髪をくしゃくしゃにして立てて、過度な寝癖のように見えなくもない。普通の短い髪の人もある。このときのベースはまだグレン・マトロックで、ギターのステイブ・ジョーンズとともに割と普通だ。髪型は。ドラムのポール・クックの髪は真ん中辺りが少し立っているか……

曲は『アナークィー・イン・ザ・UK』、可愛くも見える細面で眼の凛々しいジ



ヨニーが顔を歪め、与太ったチンピラのような歌い方でシャウトする。歌も演奏も荒っぽくて粗削りで激しく、シンプルだ。狭くて暗くて、何の装飾もないステージ。客は皆立ち見で、狭い会場には百人か、せいぜい百数十人しか入れないだろう。だがそのエネルギーは凄まじく、狂おしい。社会への不満とすべてへの鬱屈の爆発現場だ。

1977年のステージ、今では余り見られなくなったパンキッシュな服装。ジヨニー・ロトンはハーケン・クロイツに十字架のキリストが逆さまにプリントされたTシャツ、あっちこっちが破れていて、安全ピンがめったやたら刺してあり、袖は長くて、片方の袖の余った部分を折ってピンで留めて、手が出せないよ

うにしている。ピアスも安全ピンで、黒いレザーのジャケットとパンツにブーツ姿の二代目ベースのシド・ヴィシヤス（ヴィシヤスは「凶暴」、「意地悪い」の意味）のネックレスは鎖に南京錠の附いたものだ。彼の髪型はまさに総立ち型のパンキッシュ・ヘアだった。パンキッシュなファッションの客たちは皆ポゴダンス（垂直にジャンプするダンス）を踊っている。

尹緒夢の部屋の雰囲気のせいもあって、異界へのイニシエーション的な気分になっていた梨沙はすっかり魂を奪われてしまった。

「すげー」

その日から梨沙は夢中で尹緒夢とバンドの話をするようになっていた。又彼女は強烈な個性の尹緒夢に惹かれていった。

毎日、尹緒夢の部屋で動画を見た。ピストルズは相変わらずを見ていたが、古いロックも聴くようになっていった。特に27クラブ (The 27 Club) のミュージシャンがお気に入りだった。彼らは皆1970年前後に27歳で変死している。ローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズ、ジミ・ヘンドリックス、ジャニス・ジョプリン、ジム・モリソン……奇しくも20年以上を経た1994年、ショットガンで頭部を撃ち抜いて自殺したカートコバーンも27歳であった。

「ねえ、このポスターの黒人たちは何なの」

「見てわかんない。楽器持つてるでしょう」

「白黒だから気が附かなかった」

「まじ？」

これがロバート・ジョンソン、1930年代のアメリカ南部ミシシッピ州生まれのブルース・マンよ。これがハウリン・ウルフ（ナゲ凄えガタイがいいでしょ？ 太

い声出そうだよ、いや、出てるんだけど、実際（笑）、ブルース・シンガーよ。ハープもいけてるわ。それからこっちがマディ・ウオーターズ、シカゴ・ブルースの大御所よ」

「シカゴって、アメリカだっけ」

「そうだよ。何言ってるの。」

んで、これはチャーリー・パーカー。ビーバップ全盛時代を創った天才サクソフーン奏者よ」

「びーばっぷ？」

ビーバップ・ハイスクールのビーバップ？」

「古いな」

「いや、そっちよりは古くないっしょ」

「ま、そうね。1940年代の新しいジャズ・スタイルさ。当時としては速くて

複雑な、ヒップな音楽だったのよ」

「ヒップ？ お尻？」

「違う。」

スラングさ。 “クール” って言葉みたいな感じ、意味は同じじゃないけど。けっこう、時代によって、いろんなニュアンスがある。ヒップってのはさ、最先端の、イケてるものや人を指して言うんだよ。

昔見たウィキペディアだと、もともとは黒人英語みたいね。ルーツは、西アフリカのウオロフ語っていうにあるらしい。ウオロフ語で “目を開いた人” って意味の *hepicaat* って言葉が語源みたい」

「へー。凄いんだ」

「そう言えば、ロバート・ジョンソンも27歳で死んだ。

飲み物にストリキニーネを入れて毒殺されたとか、刺殺されたとかいう説があるみたいだけど、彼の妹は病死だったって言ってるみたい。

ちなみに伝説によれば、悪魔に殺された、ってことらしいわ」

「まじ？　あり得ないでしょう」

「まあね。だから伝説だって言ったでしょ。

でもブルースは悪魔の音楽って、当時は言われていたのよ」

「へー、ストーンズみたい」

「……って言うか、ストーンズはブルースの伝統の影響を受けてるのよ。ゴスペルが黒人の教会で歌われたりするのに比べてブルースは悪魔の音楽ってね、言われたのよ」

「ふーん」

「アコースティック・ギター一本で弾き語りしてたんだけどさ、当時はロバートのテクニクが凄いことに、皆驚いたんだ。

だから“十字路（クロスロード）で悪魔に魂を売って、引き換えにそのギター・テクニクを手に入れた”って言われたんだ。これがクロスロード伝説さ」

「弾きたいものを何でも弾けるようになったかったら、自分でも

曲作りもやりたかったら、ギターを持って道路が四つ辻みたいに交差している所へ行け」

「ただし、そこへ行くには夜中の12時になる少し前に行かなければならない。そこへギターを持って行って、自分で一曲弾くんだ、そうすると、でかい黒い男が近づいて来て、ギターを取り上げて、それを調弦する。そして一曲弾いてみせてから、ギターを返してくれる」

「そうやって、やりたいと思う曲を何でも弾けるようになる」

「あはは」

「それはともかく、そういうふうに言われるくらい彼のテクニクは本当に凄いものだつたみたい。

ロバートが死んだ何十年も後だけれど、若い頃のキース・リチャーズが初めてその演奏をレコードで聴いたとき、
“これは誰だい？”
“ロバート・ジョンソン”
“へー、で、もう一人は？”
“え？”
“つてことがあつたらしい。キースの耳にはギタリストが二人いるように聴こえたんだ。彼はそう言ったんだよ”

「へー、超絶テクだったんだ」

「今聴くとよくわかんないけど、確かにリフとオカズの音が両方鳴っている瞬間があつて、そういうところが二人いるように聴こえたのかもしれない」

「そうか。聴いてわかるかな」

「聴いてみる？」

聴いてみた。甲高い声、エコーのまったくないギターの音は物凄い生々しさを感じさせる。拍子もあるんだかないんだか、よくわからないような、たどたどしい瞬間もある。

「何なの、これ！」

「最初は、何だ、こりや、って感じでしょう」

「へたって言うか、素人が何の機材もなしにスマホだけで生の声を録音してみた
いだし、演奏も、何て言うの、何だかたがたな感じで、音生々し過ぎだし」

「時代が時代だから。この音は専用のスタジオとかじゃなくて、ホテルや倉庫で
録ったらしいよ」

「へえ」

「それに音楽理論を無視して、自由に強烈な演奏を創ってるからね。曲の途中で
何の工夫もなく、荒っぽくテンポが変わったりしてるから、今のあたしたちには、
かなり聴きにくいかもね」

「知らなかっただけじゃない」

「知らなかったかもしれないけれども、音楽ってものは、感覚的にリズムや音の調和を感じるものだからね。楽譜は感覚を記録したものだし、音楽理論も基礎は感覚に基づいているはずよ。」

だから知らなかったからというよりは、やっぱり何か荒々しい、エネルギーの溢れというか、前衛的な何か凄いい激しさ、って言うか、エネルギーが過剰なまでの奔放打破炸裂を求めているんだと思う。魂魄の発露とか、焦がれる魂の叫びって言うのかなあ」

「かなあ」

「エリック・クラプトンもロバートは何にも囚われず、自由に弾いていると言っ

て感嘆したらしいよ、若い頃、初めて聴いたときね」

「へー、じゃ、やっぱし、そうなんだあ」

「だよ」

こうして梨沙も尹緒夢同様、ブルースも聴くようになった。

若いうちは変化も早い。いつの間にか1930年代や1920年代のブルースまでも聴くようになった。ジャズも聴くようになった。

レコード・プレイヤーを探し求め、ジャズの古いレコードを探すなど、以前では考えられない行動をした。凝り始めていくうちに、気が附かなかった本当の自分に目覚める。覚醒する。

ファッションも変わってきた。

友だちや先生や親からいろんなこと言われるようになったし、ネットでも叩かれ始めたけど、気にしなかった。尹緒夢にさえよく思われればそれがすべてだった。

「自信があれば動じないわ。」

自信がない人間は他人の評価に依存してるのよ。いつも自分の存在が揺らいでるの。だからなめられると憤激したり、目立つやつに絡みたくなったりするのよ」

「目立つやつに何で絡むの？」

「相手が目立つてことは自分が霞むってことじゃない。だから自分の存在への脅威だって感じるのよ。それを自覚しない、できない無能なバカはムキになるのよ。」

すべてはただ、生存の原理に衝き動かされてるだけなのに、バカはそれに気が附かない。いずれ淘汰されるべき劣等人種よ。ふ。愉快ね」

梨沙はうなずいた。この時点ではもうバンドのメンバーを探す気はなかった。尹緒夢がいれば十分だ。

やがて二人で作曲を始めた。

作曲面では梨沙の方が先生だった。

「これ、どーやんの？」

尹緒夢はよく梨沙に訊いた。

「じゃ、こんな感じかな」

そうやって梨沙は尹緒夢のアイデアを音楽的に調和し、リフが音楽らしいノリを生むようにまとめ、各フレーズが整合するように調整した。アレンジもやった。

「何だか初めて曲らしい曲が、最初から最後までまとまってできた気がする」
創り終わると、尹緒夢はそう言った。

梨沙は尹緒夢の持っていたギターを借りて自家でも尹緒夢の家でもギターの練習をするようになった。

「最近、気付いたんだけど、あんた、指が長いよねー。パガニーニも指が長くて、関節の動きが滑らかだったって言うけど、あんたの指も長いね。動きも美しいよ」

「あ、それなら知ってる。それこそロバート・ジョンソンじゃないけど、バイオリン演奏が上手過ぎて当時、『悪魔に魂を売り渡して手に入れた』って言われたんですよ」

「それ、知らない。そうなんだ」

作った曲はコンピュータに入力して、ドラムの打ち込みを創り、楽曲化した。

自分のギターを買うためにアルバイトも始める。オリンピック開催前の人手不足で、バイト代が高かったところだ。時給1,380円で毎日4時間、30日間で貯めた金で買った。夏休みはそんな感じで過ぎ、9月になって、梨沙が尹緒夢に言う、

「文化祭でやってみない？」

「気分じゃないな」

「ライブが演奏の醍醐味だよ」

「何か違うんだよね。学校じゃねえ。ライブハウスでやろうよ」

「それもいいけど、打ち込みじゃ、ちよっとやばくない？ 文化祭で腕試しよ」

「そっか。ま、そうだな。減るもんじゃないし、やってみっか」

「OK！　じゃあ、明日エントリーして来るよ」

「好きにしな」

「最近、おかしいんじゃない」

亜希菜がそう言ってきた。梨沙は顔を上げる。

「何？」

「髪の色が変わった」

「気分よ」

「そういう言い方も、前と違う」

「そう？ 大人になったのよ」

「それ、何？」

「どれ？」

「スマホ」

「え？」

「何なの？」

「あゝ、曲。曲作ってんのよ」

「へー、そんなアプリあるんだ」

「作曲やアレンジ、録音ができるんだ」

「バンドとかじゃなくて独りで創ってるの？ ネットにアップしたりとか？」

「別にいいじゃん」

雨の放課後、一人教室に残り、窓辺の席でノートに曲のイメージをいくつもの楽譜の断片にして綴っていた。少し形が整うと、スマホに入れた。雨はざあざあ降っている。

文化祭の数日前、梨沙は髪型を少しパンキッシュなストリートふうにして染色のベースをフレンチ・ブルーにした。そこにコバルト・ブルーや青紫をグラデー

シヨンさせる。ド派手なつけ睫毛をして、唇に赤黒い口紅にラメ入りのグロスを塗る。

その日のうちに担任の教科室に呼び出されたが、何も応えなかった。

「指導に従えないなら、校則違反で特別指導の対象となるぞ」

「ふ」

「そうか。そういう態度なら保護者に来てもらう。そこで話し合う。それでいいのか。髪の毛の色を直せ」

「色に意味なんかない。何で色にこだわるの？ 直せと言うなら直すわ」

そう言ってせせら笑った。翌日、紫色の髪で登校した。

担任は言った。

「そういう考えなら、特別指導を行う」

「言われたとおり髪の色を変えたわ」

「直せと言うのは元の色に直せと言うことだ」

「元の色って何なの？ 色なんかないのよ」

そういつて部屋を出た。そしてスキン・ヘッドにして戻って来た。

「これでどう？ 色はないわ。色即是空よ」

「お、おまえは」

「坊主じゃいけないって書いてないわ」

と言つて、さつさと教科室を出た。こういう展開を予想してバリカンを持って来ていたのだ。

「どうにか文化祭まで首を繋げたいからね」

それを聞いてさすがの尹緒夢も目を丸くした。そして哄笑した。

「そのときの担任の顔が見てみたかったよ！」

「どの道、ここはもう長くないわ。ガッコなんか卒業よ」

学校を終えて尹緒夢の家に行くと、二人は文化祭でやる曲を相談した。梨沙が言う、

「セッティングと片づけも含めて20分よね」

「十数バンド出るからね」

「それにステージ使うのはバンドだけじゃないからな。合唱部もあるし、吹奏楽部もあるし、演劇部や映画研究会やアニメ同好会や動画クラブも使うって言うていた。弁論部もあるしね。生徒会主催のパネルディスカッションもあるんだってや」

「バンドは二日で2時間ずつしか使えないからな。仕方ないんだ」

「3、4曲しかやれないね」

「オリジナルもそんなにないからな。カバー中心でいこう」

「オリジナルなら『RAINBOW』がやりたいわ」

「いいね。1曲目はつかみで、『Cherry Bomb』でもやらかすか」

「あ、それいい。歌詞も挑発的だしね。ハードなガールズ・バンドで、わかりやすいわ」

「あたしはそれからイタルの『I Got Blues』がやりたいよ」

「あゝ、尹緒夢が最初にターン・オンした曲ね」

「そう。誰も知らないかな」

「だったら面白いけど、この辺は地元だしね。意外に知ってるよ」

「ま、どっちでも同じね」

「だったら、ロバート・ジョンソンの『Stop Breaking Down』なんか、どう？」

誰も知らなくてたぶん、皆、超引くよ」

「いいね、最高よ」

文化祭の日。初日が金曜日で二日目が土曜日だが、両方とも一般公開日だった。校内は卒業生や在校生の友人や地域の人々であふれ、賑やかである。

青と紫のかつらをかぶった梨沙はステージ脇に設けられた楽屋で、他のバンドの連中とともにチューニングしていた。

「どんなのやるの？」

2組の亜沙菜がきてきた。

「ああ？ そーね、パンクとか、ブルースかな。何で」

「ブルースってどんなの？」

梨沙はギタを鳴らした。

「こんな感じ」

「へー、よくわかんない」

「そうでしょ」

「バカにしてる？」

「別にー」

「ムカつく。調子コイてない？」

「だから何？」

「マジムカつく」

順番が来た。直前のガールズ・バンドが大うけだった。そこにいきなりランナウェイズだ。観客はちよつと引いた。その後がロバート・ジョンソン、イタルの

『I Got Blues』……

「いい感じだった」

楽屋に下がって尹緒夢がそう言った。

「そうだね」

梨沙も無表情にうなづく。

「誰の曲なの？」

亜沙菜が訊いてきた。

「ランナウェイズ」

「へー」

「あと、ロバート・ジョンソンかな」

見ずに梨沙が応える。

「知らない」

ちよつとバカにした、何それ？ って感じの亜沙菜の言い方も気に留めず、梨沙

が微笑し、

「そういうとき。ふ」

そう言い捨てて去った。

梨沙はギターの練習に夢中になっていった。のめり込むあまり成績が落ちてきた。

職員室に呼ばれ、

「このままでは進級できない」

そう言われた時、

「じゃ、辞めます」

そう言ってしまった。

「辞めちまったのか」

尹緒夢にそう言われて梨沙は冷たく答える。

「そうよ。どうってことないわ」

「ふふ。あんた、マジ変わったね」

「そう？ 大したことないよ」

「誰を入れようか」

「当てがなくもない。ま、本人には何も確認してないけどね」

鞘伽小百合の存在が気になるようになっていた。黒髪の大人しい子で、ピアノ、バイオリンを弾く。まつ毛が長く黒目がちな色白な少女だが、梨沙は自分と同じ臭いを感じる、と尹緒夢に告げた。

「あんたも開発されちゃったね。そういうのがわかるようになってきたんだ」

そう言つて尹緒夢は笑った。小百合に話したとき、

「何で、私なの？」

「何となくね。あんたのセンスに期待してるのよ」

梨沙は言った。小百合は不安げだった。

「出来るかなあ、ロックなんて」

「ブルースが出来りやいいわ」

こともなげに梨沙が言う。

「この人、かつこいい」

「へ？」

このポスターのこと？」

初めて尹緒夢の部屋に入った小百合が感嘆の声を上げたのを聞き留めて、梨沙が尋ねる。

「そう。誰なの？ 初めて見た気がする」

「ふーん、そうかもね。」

ジム・モリソン。ザ・ドアーズのボーカルよ。サイケだわ」

「どんなバンドなの」

「古いよ」

「ユーチューブとかにある？」

「あるよ、あるに決まってるじゃん」

「うそ！ まじ？ 見たい！」

タブレットを出す。観る。『Light My Fire（邦題：ハートに火をつけて）』

初めてのライブ。小百合は緊張していた。しかし終わった後、人が変わったように歓喜し、興奮していた。彼女は狂ったようにステージングを愛し、凄まじい速度でロッカーになっていた。その日のうちに小百合は黒い口紅の上に銀色のグロスを塗る。アイ・シャドウは銀と黒紫に。黒いスパイキー・ヘア、ときどき詩

を呟いた。

それを横目で見ながら、梨沙は尹緒夢に言う。

「完全にやられちゃったね。もうジム・モリソンになり切っちゃってるよ」

それを聞いて小百合は、

「最近、シドもいいなと思っているのよ」

「シド・ヴィシヤスのこと？」

彼女は自分がシド・ヴィシヤスだと想うようになっていた。痩せて背の高い彼女はシドが似合っていた。ハーケン・クロイツのプリントされた赤いTシャツに黒い革の上下を着てブーツを履いた。

そんな日々が過ぎる。

「わたしも入れてください」

小百合が振り向くと、1年生の桃茹だった。つやつやした毛先を強くカールさせた短めのボブで、まじめそうな、おとなしい子だ。

「キャラ的に無理かと思うけど」

「……わかってます。だから、ずっと言えなかったんです。でも梨沙さんが辞めちゃって。もしかしたら小百合さんも尹緒夢さんも……そう考えたら、今言わなくっちゃ、って思っ……」

思いつめた表情をじっと見ているうちに小百合は言ってしまった。

「わかった。尹緒夢に話してみる」

いつもの集会場所である尹緒夢の家に向かう途中、ずっと考え続けていたが、どう考えても無理そうだと彼女には思えてしまうのだ。

「でも、だから、いいんだわ」

そして自分も学校をやめようかと思いは始める。もう卒業してもいいころだ。

小百合は学校をやめると言い出した。

「んじゃあ、あたしも辞めるか」

尹緒夢も辞めることに決めた。

「最後に屋上ゲリラ・ライブやろうよ」

小百合の発案で、協力者、数名（奥人拳児 秘仏青磁 能渡憂耳 寒革剛侍 聖

喇さやか）を得て、放課後、ライブは炸裂した。

かんかに怒った教諭が屋上に上がって来る。数キロ離れた民家から苦情が来た。

辞めてからはストリートでライブやったりもしたが、だいたい、尹緒夢の部屋で演奏したり、録音したり、曲作ったりしながらも、だらだらと怠惰に過ごした。

気分はベガーズ・バンケットのジャケット写真（内側）だった。

起き上がった小百合が唐突に言った。

「あれ、けっこう好きなんだよね」

「何」

「かなり古い曲なんだけど」

「だから何」

「『I Love Rock N' Roll』ってやつ」

「あゝ、かなり古い」

「ブリトニー・スピアーズがやってたね。2001年頃」

「莫迦だな、それはカバーさ。ジョーン・ジェットだよ。1981年さ」

「いい加減にしろよ、ジ・アロウズの曲だ。1974年だ」

「取り敢えずやってみる？」

「いいねー」

ヘビーなベース、ドラム、ギターのリフ。

「イケる」

尹緒夢は憂鬱な顔。

イタルのことを考えていた。

彼が死んだとき、彼はまだ十七歳だった。

自殺ではなかった。

パフォーマンスだった。

けど、図らずも死んだのではない。

絶対に死ぬってことはわかっていた。誰もが嫌否する『死』というものがオカズ（装飾）として必要であつたというだけのことだった。或る意味、自殺との差異はない。意図的に死ぬという意味では。

ただ、彼の動機は死ぬこと、死にたい、ではなかった。命を燃やすことが表現上、必要だったし、誰もがやれないことをやることを、彼は究竟として望んでいた。そういうことだし、そういうことでしかない。

それが尹緒夢を苛んだ。

イタルはガソリンかぶって、誰も登れない眞神山の大磐代の上から飛び降りるという「歌」を歌ったのに。ヴォーカリストとして。あたしは、いったい、何してんだよ！　そういう焦燥だった。

いく晩も眠れなかった。他に悩みがないから。

死に取り憑かれた。死を義務のように感じた。それを回避するのは卑怯だと思えて仕方なかった。不誠実だと。

憑かれていた。憑かれてしまっていた。苛まれた。だったら死ねばいい。でも怖かった。怖いからできない。何でイタルは軽々できてしまったのか！　あたしは！

そんな或る日、梨沙が尹緒夢の前でつぶやいた。

「シドが二十一で死んだのに、今わたしが生きてるってあり得ない」

尹緒夢の中で何かが吹っ切れた。

「ふ。

くだらないね」

「何よ」

「何、普通なりアクションしてんだよ。ブルースじゃないね。他人も自分も裏切れ、すべてに韋逆するんだよ」

その頃、彼女らは人前で演奏できる場所がなかった。スタジオ（尹緒夢の部屋）にこもりっぱなしで、勢い、凝った音作りに嵌まっていた。

それはバビロニアの宗教のようにエキゾチックでもあった。民族的なサウンドが多用されている。ステージでは再現できない音だった。つまり彼女らが3人ずつくらいいなければできないということだ。

「シンプルな音づくりに戻ろう」

尹緒夢が或る日そう言った。

「ライブで録音するんだ。Get backだ」

環状列石の中央にシヴァ・リンガのある庭でライブした。超サイケな格好してやった。篝火焚いてハイになって狂裂した。

コンガ叩く。ハープ吹きまくる。髪を七色に染めて躍る。踊る。跳る。誰のためでもない。Without Cause. 天翔けるかのように、身も裂き砕くかのように。天空を迸る彗星の究竟。イタルになりたい。自滅したい。

神のために舞う。人の評価なんかあてにならない。人はいつも自分を肯定しているだけ。自分を代弁する者、補強する者、それらを自分の都合で褒め讃え、貶し、誹謗中傷し、溜飲を下げているだけ。誰のためにも歌わない。尹緒夢はそう思った。

神のために歌う、無空に向かつて。尹緒夢の刺青が青く光った。彝龍の裂を象っている。

或る時、尹緒夢の部屋でぼんやり流れる曲を聴いていた。

「これ、何？」

梨沙がそう訊いた。尹緒夢が応え、

「アルト・サックス」

「そうじゃなくって、誰が吹いてるの？」

「あゝ。

これがチャーリー・パーカーさ。前に話さなかったか。1920年生まれ、1955年に亡くなった。わずか35歳よ。早過ぎるだったわ。たぶんエルビス・プレスリーの活躍すら見ないうちにこの世を去ってしまったのよ。薬とアルコールのせい。27クラブに入るほど若くはないけど、その歳で、心不全で亡くなるなんてね。よほど体を痛めつけていたんだわ。

残念過ぎるよね。物凄く才能だったのに」

「へー。でも何て言うか、ひらりひらりと、自由自在、って言うか、軽業師みたい」

「マイルス・デイヴィスによれば、バードに言い表しようのない、いくつかの演奏スタイルがあつて、誰にもまねできない、つて言っていたわ」

「バード？」

「ヤードバード yardbird つて呼ばれていたのよ。」

ヤードとも言われたし、バードとも言われたみたいだけど、今も昔もバードつて呼ばれることが多いみたい」

梨沙がスマホで調べる。

「ヤードバード、四人、初年兵……何で？ ふーん、もしかして、ヤードとバードに分けてみたらどうかしら……。あれ、庭の鳥？ 何なの？」

「諸説あつて、意味はよくわからないみたいね」

「ふーん、あ、これ」

「『ナウズ・ザ・タイム』よ。イケてるでしょう」

「うーん。でも、きつと、短い演奏人生だったのね」

「想像以上にね。実質的には1945年から48年ぐらいが全盛期よ。革新的なアドリブが凄かったんだけどね」

「もしかして、ヤードバースって」

「そうよ、チャーリー・パーカーの呼び名から来てるのよ」

「エリック・クラプトンやジェフ・ベックやジミー・ペイジが在籍していた凄い

バンドよね。特に1966年なんかベックとページが同時に参加していた時期で、今考えると信じられないわ」

「ページの『Whole Lotta Love』は正直、宇宙最強だと思う。究極だよね」

でも尹緒夢は寂しげに言った。

「そうね。でもさ、誰も認めないけど、あたしらもうやり尽くした気がする」

秋になるころ、窓を左右に大きく開いて、棧に坐り、ボブ・ディランの『風に吹かれて』を聴いていた。

「クラーズのような生活を送るのよ」

ある日、突然、尹緒夢が言った。

「クラーズって？」

梨沙が訊いた。

「1976年から1977年にセックス・ピストルズが起こしたムーヴメントが
終わった後も、インディーズ・シーンでは、まだパンクが生きていたのよ。イン
ディーズからメジャー・シーンに出て行ったパンクが終わった後に再びインディ

ーズ・シーンで復活した。

そういうバンドの内の一つね。

反戦とか、反核、フェミニズム、動物愛護や環境保護なんかを訴えてポジティブ・パンクというカテゴリーに分類されたりもするわね。

だからフォークランド紛争のときは激しく抗議活動をしたバンドとしても有名ね。アナーク・パンク（無政府主義・パンク）とも言われたわ。つまり「左翼でも右翼でもなく、アナーキストである」と言ってたらしい」

1977年、ヒッピー世代の元パフォーマンス・アーティストのペニー・ランボー（ドラムス、作詞。フランスの19世紀の詩人アルチュール・ランボーを崇

敬していた」と、彼より20歳も若いパンクスのステイヴ・イグノーラント（ボーカル、作詞）が出会うことにより生まれた。

ふたりは互いの詩を見せ合って共鳴し、コミュニケーション（自給自足の農場と廃屋で、「ダイアル・ハウス」と命名された）を作って共同生活を始めた。

楽曲「So What?」と、「Do They Owe Us A Living?」のデモ・テープを創る。やがて「バンド」の噂を聞きつけ、次第に仲間が集まる。家族を伴って移住してきたのだ。

最終的には十二人の人間と二十匹の猫が住んだ。

スモール・ワンダー・レーベルは当時、パンク・バンドの発掘に熱心だった。

クラスはそこからファースト・アルバム「The Feeding of the 5000」をリリースするも、1曲目の「Asylum」の歌詞が問題となつて2分間の無音トラックとして収めた。

クラスはレーベル「クラス・レコード」を設立した。ジャケットの印刷は、どこの印刷所からも引き受けてもらえず、高価な印刷機を自分たちで調達するなど、後のパンクにおける「DIY精神（自分たちでやること）」の手本となつたという。

レーベルからは、自分たちの作品のほかに、ポイズン・ガールズ、ザ・モブ、ザウンズ、コンフリクト、キャプテン・センシブル（元ダムド）、ククル（ビョ

ークが在籍）ら、100組近いバンドを紹介している。

だが共同生活は長く続かなかった。不自由ばかり、仲間同士の軋轢は竟に限界になり、まず小百合が去る。その次に言い出しっぺの尹緒夢が去り、梨沙が去つて、最後に桃茹が残った。数カ月が過ぎる。それでも彼女は皆が帰って来るのを待ち続けた。

作業を終えて夕方になると、風に吹かれながらただ草原で歌う。他にどうしようもない。



序